

もう1つの事業で 診療所部門を支える

安宅潤司氏

医療法人桐葉会
中之島フェスティバルタワー・
さくらクリニック
ミドルマネージャー



あたか・じゅんじ●大学卒業後、現法人に入職し、勤務しながら看護学校を卒業。卒業後は看護師として急性期病棟、訪問看護ステーションなどに在籍。2014年、法人の新規事業として設立された中之島フェスティバルタワー・さくらクリニックに異動。リワークデイケア、外来業務に従事しながら、法人内EAP会社「さくらクリニック&Co.」の代表取締役も兼務

企業との連携です。当初から当院には、受診希望の患者さんだけでなく企業の人事・労務担当者からの問い合わせも頻繁にありました。

「ストレスチェックってどうやって始めるのですか」「従業員が休職したのですがどうすれば」「産業医を探しているのですが」……などといった問い合わせにそのつど答えていましたが、日を追うごとにニーズの大きさを実感していました。

そこで、そうしたニーズをより丁寧に深く汲み取るため、メンタルヘルスサポート会社「株式会社さくらクリニック&Co.」を設立しました。ストレスチェックを軸に、▽人事労務担当者へのサポート、▽産業医派遣、▽保健師派遣、▽セミナー——などの事業を展開しています。人事労務担当者のサポートをしていると、企業の健康管理（産業保健）には、時代の変化に応じたトレンドがあることがわかってきました。

わかりやすい例を挙げると、コロナ禍ではワクチン接種のニーズが爆発的に高まり、受付開始とともに予約枠はあっという間に埋まり、1・2回目接種は近隣企業の

社員、延べ800人に接種しました。一方、2020年6月に大企業、22年4月に中小企業に対して「ハラスメント防止法」が施行されると、パワハラを中心としたハラスメントの相談が一気に増えました。

そして近年、目に見えて増えているのが精神科産業医の依頼です。「産業医はいるが精神科医ではないので、相次ぐメンタル不調者への対応のために2人目の産業医として精神科医を選任したい」という依頼です。

クライアントと向き合い多くの話をする中でニーズが浮き彫りになり、一緒に解決方法を考えるなかでそれが新たな展開となって、事業は少しずつ成長しています。設立から9期を迎えましたが、今ではリワークデイケア、診療所診療を超える収益を上げており、当院の経営を支えています。

診療科により異なるとは思いますが、どの診療科でも、診療事業を支える「もう1つの事業」が存在すると思います。トレンドやニーズをくみ取って収益化するのは簡単なことではありませんが、実現すれば、診療所運営の大きな支えになるのは間違いないと考えています。

事業モデルを考え発展させるのは、事務長の大きな役割ではないかと思います。

当院は、大阪屈指のビジネス街・中之島にある大都市型心療内科診療所です。2診体制で外来を行い、最大50人が参加できる休職者の復職支援施設（リワークデイケア）を併設しています。

土地柄もあり、9割以上の患者さんがビジネスパーソンで、うつ病や適応障害で通院されています。そうした層が通いやすい立地にテナントを借りていますが、悩ましいのは、その分、賃料や人件費がかさむことです。また、オフィス街は午後3時～午後6時までのデイトイムの診察枠が埋まりにくい傾向にあります。

開院当初から「経営のため何かできないか」と考え続けていたところ、外来以外のニーズに応えられないか気づきました。それが、

一般社団法人診療所事務長会

<https://cl-manager.com/>

2016年1月発足の診療所事務長会の。診療所事務長や院長などが集まり月1回の勉強会を開催しているほか、日々の仕事についても互いに助け合っている